

発行所
特定非営利活動法人
北関東産官学研究会
群馬県桐生市織姫町2-5
桐生地域地場産業振興センター4階
郵便番号376-0024 電話0277-46-1060

Hi Ka Lo News

Highland Kanto Liaison Organization

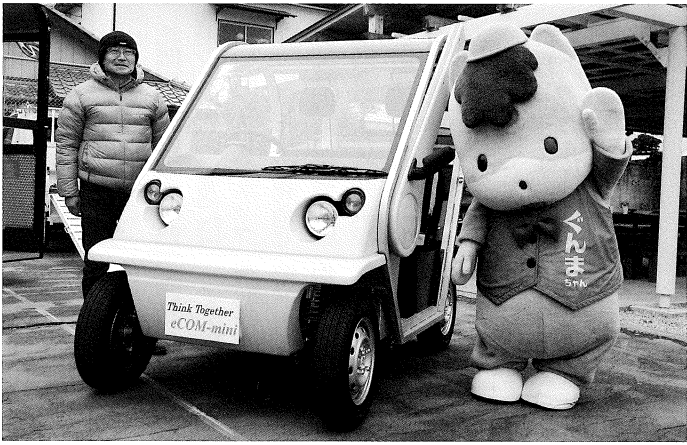
URL <http://www.hikalo.jp/>

2015年(平成27年)3月31日

第49号 (年3回発行)

観光客や高齢者の足に

シンクトウギヤザー イーコム・ミニを完成披露



開発された横掛け2人乗りの超小型低速電気自動車「eCOM-mini」(桐生市東久方町の四辻の齋嘉で)

低速小型電動バス(eCOM-8)を開発したシンクトウギヤザー(桐生市相生町五丁目、宗村正弘社長)が、今度

は2人乗りの超小型低速電気自動車「eCOM-mini(イーコム・ミニ)」を製作した。横掛け2人乗りながら、普通乗用車1台分のスペースに3台駐車可能なコンパクト設計。同社ではさらなるコスト削減を図り、今夏をめどにナンバーを取得。最高時速19km/hのスピードを売りに、観光客や高齢者の足として販路開拓を目指す。

イーコム・ミニは全長約2.2m、車幅約1.3m、高さ約1.7m。全長は普通車の車幅とほぼ同じで、直角駐車をすれば普通車1台分の駐車スペースに3台駐車できる。

アはなく、転落防止用のガードバーを上げ下げして乗降の降ろしする。バッテリー充電は家庭用100ボルト電源でOK。3時間のフル充電で30分走行できる。デザインを担当した同社デザイン顧問の高橋正史さんは、フレームの

フル(曲線)でキューリーなイメージを出してみたり、MAVUと同色の黄色にしてみたり。少ない部品で最大の効果を出すにはどうすればいいのかわ、苦心した」と話す。同社では、テーマパークや温泉地といった観光地のレンタサイクルの替わりとして、あるいは、まちなかの高齢者の足代わりとしての需要を見込むが、課題は販売価格。宗村さんは「リチウムイオン電池をはじめ、高価な部品の利用を見直し、100万円を切る価格で販売したい」と話

す。新しい交通システムの注目度は高く、すでに3社と販売店契約を結んでいるという。今後ナンバーを取得し、7月をめどに販売を開始する予定だ。

四月は旅立ちの季節である。家庭から学校へ、学校から実社会へと夢豊かな出発である。

本研究会主催の「ものづくりカレッジ」が2月、桐生市織姫町にある桐生地域地場産業振興センターで開かれ、群馬大学工学部元教授の齊藤勝男氏が「鉄鋼材料入門」をテーマに講義した。

技術の基礎から現場技術者向けの応用、さらに最新情報まで、鉄鋼材料についての知識を網羅する全5回の講座。鉄そのものだけでなく鉄に亜鉛をスッキ処理した「トタン」や、鉄にス

ズをスッキ処理した「ブリキ」など、人間は鉄を上手に活用し、豊かな社会をつくりあげてきた。

12日に開かれた講座で齊藤さんは、身近な鉄について「埋蔵量が多くて安価」「熱処理によって強さや固さをコントロールできる」「リサイクル可能」など、改めて特徴を紹介。結晶構造や充填率、熱・圧力、合金のしくみなど、金属の性質を決める要素についても詳しく説明した。

受講生たちはメモを取りながら、大学講義のような雰囲気の中で専門知識に耳を傾けていた。



鉄鋼材料について講義する齊藤勝男氏(桐生地域地場産業振興センターで)

コーディネーター企業支援に力こぶ体制変わらずに群馬県の次世代産業振興戦略などを推進するコーディネーターについて、

て、本研究会では2015年度も9人体制を維持する。群馬県の14年度ものづくり補助金採択率は67.7%と、全国平均の39%を大きく上回り、コーディネーターの取り組みが功を奏しており、今後も県内中小企業の活動支援に力を入れる。コーディネーターの内訳は成長産業支援7人と医工連携2人。

の関根敬浩さんは話す。「申請書を作るときは読む側の立場に身を置いた。彼らが何を信じ、何を感ずて生きていたかを残した記録はほとんどない。社会とは隔絶するところが目的であるから人間社会にそんな情報を返すことはない。道義にその片鱗が垣間見られる程度である」人間は社会を形成して支えあっている動物であり、その社会の規則を守って生きる責務があるという考えもある。しかし、その社会を否定して孤独な生活圏に生きてしまったりどうだろか▼ふとそんな想いにとらわれるのは、自分が夢のない出発をしながらかえって人間社会にどっぷり浸りきっている証左かも知れない。(紀)

研究会とともに歩む



桐生商工会議所会頭 山口 正夫さん(66)

種を育てる役割担う

共同研究について、山口 たとえば、共同研究は種をつくる作業。北関東産官学研究会の共同研究助成は種つくりを支援する役割を担っている。商工

ハードルは高い。商工会議所が目指す取り組みは、山口 会頭就任後、小規模事業者支援のた

【X】山口正夫さんは1949年生まれ。明治大学工学部を卒業後、豊田産業に入社。現在トヨタプロダクツ社長。昨年10月、桐生商工会議所の第14代会頭に就任。桐生機械工業連合会やファッションタウン桐生推進協議会の会長も務める。桐生商工会議所の初代会頭・森宗作の言葉「郷土の繁栄なくして事業の発展なし」を胸に、地域の発展を見据える。桐生市堤町在住。

たいたい、そんな取組を考えている。国や県も販路開拓の面を力を入れた。山口 最近産官学の言葉も定着しつつあるが、金融機関による融資は欠かさない。多くの中小零細企業にとって販路開拓は難しい。商工会議所とすれば、企業に寄り添いつつ、伴走形の支援を続けること。山口 北関東産官学